

舞鶴港の棧橋に着いたとき、本当に祖国日本に着いたと感無量だった。これからは誰も捕虜生活をしなくてもよい、多くの犠牲者を出さない平和な社会であってほしいと祈るものである。

## シベリア抑留記

滋賀原 川端 増雄

生年月日 大正六年三月十八日

現役入隊 昭和十三年一月十日 満州国東安省半

截河 満州派遣軍第五十部隊

応召入隊 昭和十九年七月十七日 京都第四十部

隊(野砲)

昭和十九年九月三日、駐屯地北海道網走から一路、千島列島エトロフ島に向かう。悪天候を衝いて約三トンの機帆船に野砲二門を積載し出発。時化のため船は真つ二つに割れて遭難、近くにいた海軍防衛艦に救助

され、無事エトロフ島の目的地に到着。ここで軍の編成が終わり、三井隊に編入される。直ちに大隊本部勤務を命ぜられ、終戦まで従事。主に經理処理を担当。

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の終戦宣言を営庭にて全員集合の上拝聴、戦争終結を知る。

八月二十日、三井隊より長期勤務者七人(本人を含む)に対し、エトロフ島で現地満期を命ぜらる。衣服・食糧をもらって除隊。島の東の方に行って船を探したが情報は得られず、船もなく、とにかく近くの洞窟で五日間ほど暮らす。近辺に地方人がいたが船の状況についてそれらしい情報も得られず、食糧もなくなり途方に暮れて、元の三井隊に入隊しよう中隊への連絡をとり、ようやく再入隊が認められ、七人は本隊に復帰させてもらう。

九月十五日、ソ連軍がエトロフ島に上陸、エトロフ・トウネイ飛行場にて武装解除される。約一カ月間、ソ連兵監視の下に兵舎にて船を待つ(北海道へ帰るためだという)。

十月中旬、船がエトロフ港に入ってきた。約三千ト

ン級の鉄船だったが、中隊全員が乗船させられ、北海道へダモイということで二十日ごろ出航する。船は進むが、いっこうに北海道らしい島は見え、この頃、樺太の真岡に寄港、油や石炭を積み込む。間もなく船は出航して航海を続けるが、北海道は依然見えず、三重県から入隊した兵隊が漁師だった経験から船は北へ進んでいることを確認するも、全員はこれを信用せず、一途に北海道へのダモイを念ずる。

昭和二十年十月末頃、船は海上を彷徨しながら、ある日の朝、港に着く。岸壁には赤旗が翻り、上陸するや星のついた赤い列車が無数に集結していた。ここで初めてソ連領に連れてこられたことを知らされる。無蓋車を連結した貨物列車に積み込まれ、三〇五日間揺られつ放しで到着したのがソフガワニという駅だった。

とりあえず、その収容所に収容される。夕方、ソ連軍の人員点呼があるということで一切の持ち物を部屋に置いて外庭に集合させられる。人事調査が終わって部屋に帰ってみたら、持ち物は全部取り上げられ丸

裸となる。点呼の際には金の入れ歯まで外せとせがまれたが、逃げまくってようやく難を逃れる。その夜の夕食は無し。朝食は豆のスープのみ。昼食は一片の黒パン二〇〇グラム。夕食は豆のスープのみ。

昭和二十年十一月初旬、翌日から作業に引き出される。以後、収容所から十キロほど歩いたところの森林で毎日伐採作業に従事。主に燃料用の割木作りに専念。毎日の作業は、ノルマ完遂指示でへとへとになる。食事は到着時とほとんど変わらず、一片の黒パンと一皿のスープのみ。体力はみるみる衰え、めまいが統発して仕事にならなくなる。それでもソ連兵の銃剣に叱咤され、死力を尽くして動くより仕方がなかった。そのうちに逃亡の話が持ち上がったが、このソ連軍の極北の地で行くあてもない無謀な計画は成功の確率がないと気付き諦める。

昭和二十一年四月頃、伐採作業が応終わると、次はソフガワニ港の木製の栈橋づくりに従事。主として石炭や割木の積みおろし用のものであった。四月といえどもシベリアはまだ厳寒、海の潮風にあおられるし

ぶきが衣服にかかって真つ白になる。海中への杭打ちに全身海水を浴びながらの作業で苦闘がつづく。約一年間この作業は続く。

昭和二十二年四月頃、ソフガワニからコムソモリスクに移動させられる。ここでも鉄道工夫や森林伐採の苛酷な作業が続く。飢えと寒さに耐えながらも出る話は食うことばかり、人間も、最低生活基準である食の限界にすれば全く動物と同じような感覚、動作となる。作業中、死亡者や病没者が続々出る。死体は真つ裸にされ、十〜二十人とまとめて作業所近くで掘った穴と一緒に放り込まれる。墓標を建てるわけでもなく、尊い人命も出けら同様の扱いとなる。

ある日、あまりの空腹に耐えかねて、近くにあった川芹を持ち合わせの塩をまぜて飯盒で炊いて、少しでも腹ごしらえをしようと食べ始めた。十分か二十分しかかと思われるころ、一人また一人と血を吐き出し、やがて芹を食べた者全員が七転八倒の苦しみの上、次々と命が絶えていった。まさに毒草を食べたわけ、食うことだけが望みだっただけに、毒草かどうか

など調べる余裕すらなかったのである。ここでも非業の死を遂げた抑留者がいた。

作業は依然厳しく、ノルマ達成によるソ連兵の制裁は言語に絶し、食べるものは与えられずマンドリンの銃床で叩きつけられた。

昭和二十二年六月頃、約二年の強制労働に服した抑留生活のあと、ある日、ソ連軍将校が来て大隊から二人を選び出す。このうちの一人に私が指名される。成績がよいから東京へダモイさせるといふ。約一週間、同僚の抑留者が羨望するような食事と休養を与えられて特別扱いとなる。間もなく貨車に積み込まれてハバロフスクに連れて行かれる。ここで他の抑留者に合流してナホトカへ移動する。

昭和二十二年七月頃、ナホトカでは徹底的な民主化教育を受ける。第一幕舎から第三幕舎に至る三段階教育を強行される。これが終わるとようやく大隊ぐるみでナホトカから乗船、第一大拓丸で七月二十八日、舞鶴に復員した。